

カンジャーヤーの始まり

長浜真一 (1910・M43) 字長浜 (02 : 33)

自分達が小さる時分、つまり十一、二ぬ頃までい 鋏 へーちやい、 籠 へーちやい、或いやナービヌ ナクーさい、此処をうとーてい 氣張いみしえーたしが。

此処んかい、いめんそーちやる親祖先や、首里から 韃 道具担みていいめんそーち。メーヌヒラをうとーてい 暑さいに 憩 とーみしえーる場合に、仲 殿 内 ぬ親祖先んかい、「何処んかい 通いが、二 才」でい言やでいみそーちやぐとー、「な一、何処でいん 当ていん無らん、自分ぬ泊まいん 所 ンかい落てい 着けーやーでい思やびん」でいうんぬきたぐとー。 仲 殿 内 ぬ親祖先ぬ言みしえーるくとーぬ、「あん るんやれ一、当てい無しに彼処くま歩っちんならん むん、くぬシマをうとーてい 留 までいなるむん るんやれ一、業 ンすしえーましえーあらに」んでいぬ 事 なたぐとー。

くぬナービナクーん、仲 殿 内 ぬ言みしえーる 言 葉守てい、くぬシマンかい 留 まんそーち、今 に残とーるカンジャーヤー、此処をうとーてい 業 氣張いみそーちやしが、長浜をうとーていぬカンジ ャーぬ始まい。

くぬ親祖先や、今、宮 城 んでいぬ名あ貰てい、 其処をうとーていいうみはまいみそーちゃんんでいぬ 事 し。カンジャーヤーや近頃んまでい自分達がゆ 一 覚とーる 事 やしが。鋏、籠 へーひんそーちや い、ナービナクーさい、また其処をうとーていナービ ナクーから落ていーる金屑ぐわー、自分達ん貰てい 福たる場合んあい。くぬカンジャーヤーから長浜ぬ 百 姓ぬ使いる 鋏、籠、優り物ぬ出じていさん りる 話 ン今に残とーる次第。

【共通語訳】

私らが十一、二歳の頃までは、長浜にも鋏や籠を 研いだり、鍋の修繕をする鍛冶屋があったんだがね。

長浜にいらした鍛冶屋の祖先は、首里から鍛冶道 具を担いでいらしたそう。その途中、暑かったので 長浜のメーヌヒラ（前ヌヒラ）で休んでいたら、仲 殿内の人に、「どこに行くのか若者よ！」と声をかけ られた。その人は、「もう、どこに行くあてもありま せん。泊まれる所でもあればそこに落ちつきたいと 思うのですが」と答えたそう。すると、仲殿内の人に 「当てもなくあちこち歩くより、この村に留まって 仕事でもした方が良いのではないか」と言われた。

この人は仲殿内に言われた通り、長浜に落ちてい て鍛冶仕事に励んだ。これが長浜での鍛冶屋の始ま りである。

その鍛冶屋は、宮城という名を貰って長浜で頑張 ったというわけだ。鍛冶屋では最近まで、鋏や籠を研 いだり、鍋の修繕をしていたことを、私もよく覚えて いる。また、それらを修理する時に落ちる金屑を貰っ て、喜んだこともあった。そこの鍛冶屋で、長浜の百 姓が使う鋏や籠など、優れた物が作られたという話 が今に伝えられているわけです。

うん いくさ ばす がま
去^{うん}じ^{いくさ}ゃ^{ばす}る戦争^{がま}ぬ場合^{がま}や、く^{がま}ぬ洞窟^{がま}をうとーてい
ひなん むらはんぶん にし ほう がま
避難^{がま}しみそーち、うれー村^{がま}半分^{がま}、北^{がま}ぬ方^{がま}やく^{がま}ぬ洞窟^{がま}
をうとーてい戦争^いぬ場合^いぬ 命^{いぬちし} 助^{いぬちし}か^いい^{いぬちし}み^{いぬちし}そーちゃん
でいる 事^{くとう}。戦争^いぬ 終^い 結^いぬ場合^いにやていん 恐^{うとう}るさ
し、此^{くま}処^{うん}から出^いじ^いみ^いそーらん。二^に、三^{さん}人^にお其^{さん}処^にをう
とーてい毒^{どく}ガス^な投^いぎ^いらりやーい、世^ゆう^{ふる}滅^いび^いん^いそーち
やんでいぬ人^{ちゆ}んいぬんしえーんでんでいぬ 話^{はなし}。

去る戦争の場合には、北側に住んでいた字民の半
数が、そのカンジャーガマ（鍛冶作業をしていた洞窟）
へ避難して命拾いをしたということだ。終戦になっ
ても外に出るのを恐がって洞窟に残った人もいた。
それで、毒ガスを投げこまれて、二、三人亡くなった
という話だ。